

未来への伝承

94

裁縫所と雛形

— ミニチュアの衣類たち —

雛形④ かいまき
(30×28cm)雛形③ 布団
(28×22cm)雛形② 袴
(47×34cm)雛形① 長着
(51×43cm)

※雛形①②は土浦の裁縫所の先生が制作、③④は水戸の大成高等女学校で制作されたもの。

戦前、農作業がひと段落したころ、嫁入り前の若い女性たちが土浦の町へ大勢やってきました。目的は「針仕事」を学ぶためで、土浦には和裁を教えてくれる裁縫所がいくつかありました。町場や周辺の農村に住む人々は「通い」でしたが、遠方から来る女性たちは「居つき」、つまり泊まり込みで裁縫を学んでいました。彼女たちは生活に必要な米・味噌などと布団を荷車にのせて、親に伴われて集まってきました。土浦のとある裁縫所は二階建てで、二階の5畳の広い部屋が教室と寝室を兼ねていたそうです。多い時には80人もの居つきの女性たちが寝泊りをし、家の人が時折差し入れてくれる食べ物を楽しみしながら、土浦で一冬を過ごしました。

行方郡麻生町(現行方市)出身の明治生まれのおばあさんは、戦前に土浦高等女学校(現土浦第二高等学校)に入学しました。もちろん通学はできないため、土浦での下宿生活でした。女学校でも裁縫は授業に取り入れられていましたが、このおばあさんは卒業後も土浦にとどまって裁縫所で習い直しをしたそうです。かつての土浦の町には、裁縫を教え、それを学ぶ女性たちが集う「場」が存在したわけです。

現在、わたしたちは大量生産された衣料を店で購入することが当たり前の生活となっていますが、かつての暮らしでは衣料は自分の家でまかなわれるものでした。そうした暮らしのなかにあつて、家族の着物を仕立てたり、日々の繕いをしたりすることは、大切な家事として認識されていました。したがって、お針を学ぶことは嫁入り前の女性の大事な修行だったのです。

また、裁縫所では裁縫についての技術だけでなく、行儀作法を教えてくれたそうです。裁縫所は花嫁修業の場でもありました。

このような裁縫教育では、「雛形」とよばれる小さな着物を作ることを通して、その技術を学ぶことがありました。明治7(1874)年に雛形尺を考案し、雛形を裁縫教育にとりいれたのは、東京家政大学の創始者渡辺辰五郎(1844~1907)だといわれています。雛形は人形の着物のように小さなものですが、布を裁つ方法や縫い合わせなどは、原寸のものと同じようにして制作されています。着物を小さく仕立てることで、授業の能率を高めることができましたし、小さく作れば布の節約にもなります。小さいので保存にも場所をとりません。さまざまな種類の着物の縫い方を、雛形作りを通して学んだわけです。ミニチュアの着物には、針仕事を一生懸命学ぼうとした女性たちの思いが詰まっていることでしょう。

ご紹介した「雛形」は、平成23年度春季展示にて、6月下旬まで展示いたします。

く探しています

博物館では、裁縫所や女学校での生活について教えてください。資料をお持ちの方を探しています。はたおりの針仕事、着物に関するエピソードなどの情報もお寄せください。

そのほか、古文書・古写真・民具などの調査も行っています。お気軽にお問い合わせください。

国土立博物館(☎824・2928)